

「アート：見えなないものを見る」

最近ではテクノロジーが発達すると、今よりもっとクリエイティビティーが重要になるという意見が聞かれるようになってきました。クリエイティビティーとは、ルールに従うことなく、ルールを疑い、新しいルールを提案することです。それは古いルールを壊すことにもつながります。

アートは現代においては、もはや絵画と彫刻のことではなくなっています。それは、ものの考え方なのです。たとえばアートとデザインの違いは、デザインは問題解決の方法だが、アートは問題提起が本質であるといわれます。というところでアートは、単に美しいものづくりのことではなく、物事の本質を見抜くこと、洞察や直感で、我々が生きる現実を理解すること、につながっていると考えられています。そのような視点にたつと、アートはとても深いものだと、言うことが出来るでしょう。クリエイティブでなければならぬ現代において、アートの教養としての重要性をお話しします。

南條史生 森美術館館長

2020年より
同館特別顧問就任予定

2020年1月15日(水) 18:15~19:45

慶應義塾大学 日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

無料・予約不要 対象:研究者、教職員、関心のある塾生



Fumio Nanjo

慶應義塾大学経済学部(1972年)、および文学部哲学科美学美術史学専攻(1977年)卒業。国際交流基金(1978~1986年)等を経て、2002年より森美術館副館長、2006年11月より現職。2019年末にて館長を退任し、2020年より同館特別顧問就任予定。過去に、ヴェニス・ビエンナーレ日本館(1997年)および台北ビエンナーレ(1998年)のコミッショナー、ターナー・プライズ審査委員(ロンドン、1998年)、横浜トリエンナーレ(2001年)、シンガポール・ビエンナーレ(2006年/2008年)アーティスティック・ディレクター、茨城県北芸術祭(2016年)総合ディレクター、ホノルル・ビエンナーレ(2017年)キュラトリアル・ディレクター等を歴任。森美術館にて自ら企画者として携わった近年の企画展に、「医学と芸術展:生命(いのち)と愛の未来を探る—ダ・ヴィンチ、応挙、デミアン・ハースト」(2009~10年)、「メタポリズムの未来都市展:戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン」(2011~12年)、「LOVE展:アートにみる愛のかたち—シャガールから草間彌生、初音ミクまで」(2013年)、「宇宙と芸術展:かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」(2016~17年)、「建築の日本展:その遺伝子のもとらすもの」(2018年)、「未来と芸術展:AI、ロボット、都市、生命—一人は明日どう生きるのか」(2019~20年)等。近著に「疾走するアジア—現代美術の今を見る」(美術年鑑社、2010年)、「アートを生きる」(角川書店、2012年)がある。

主催:慶應義塾大学教養研究センター お問い合わせ:toiawase-lib@adst.keio.ac.jp